

授業実践報告：中学生との英語交流授業

English Classes with Junior High School Students:
An Attempt at Elementary School

金沢大学教育学部附属小学校 乗富章子

Elementary School attached to the faculty of Education, Kanazawa University

NORITOMI Akiko

This paper is a record of the exchange English classes between the fourth grade class of the elementary school and the second graders of the affiliated schools with Kanazawa University.

It has been long since teaching of English was introduced at the elementary school level. Kanazawa City took the initiative in putting the accent on it at the municipal elementary schools. Our school also started English education in 1996 deciding to consider the subject required. Section 1, in the first place, provides an understanding of the attitude toward English education of the school. The following sections discuss the actual situation of our exchange classes with junior high school students, with reference to the author's analyses and impressions. Relevant quotations from students' essay book (*Ayumi*, literally "Progress") are used in the sections. It will be most appreciated if they promote a better understanding about how the students viewed the classes and what they learned from them.

はじめに

本稿は、今年度初めての試みとして実施した、附属中学校2年生選択英語コースの生徒と附属小学校4年3組児童との交流授業の実践をまとめたものである。

小学校に英語が導入されてかなりの年月が経過した。中でも金沢市ではいち早く「英語活動」としての実践を始め、平成17年度からは小学校3年生から「英語科」として教科化した取り組みを始めている。

本校でも金沢市と同じく12年前から英語教育を始めた。本校は、様々な議論を重ねた結果、教科化は行わず、「必修」として英語を位置づけている。その理解を深めるために、まず1では、附属小学校における英語教育について述べる。

そして2、3、4、5、6では、年間4回行なった交流授業の実際を、所感や分析をふまえながら述べることにする。また、それぞれの実践を終えた児童の感想を、本校児童が毎日書きつづっている生活作文「あゆみ」から抜粋して掲載した。その中のY. O児の感想は4つの実践すべてに掲載してある。児童の目に交流授業がどう映ったか、その中で児童は何を学んでいったかを継続して見取ることができれば幸いである。

1 本校の「英語」について

1-1 本校「英語」の目標

目標を次のように定めている。

英語によるコミュニケーション活動を通して英語への関心を高め、聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を培う。

1-2 運用の方法

本校が英語教育を始めてすでに12年が経過した。先述したように、本校の英語の位置づけは、「必修英語」である。

「必修」を、本校では以下のように理解している。すなわち、全学年で年間通して学習するが教科書はなく、評定による評価も行わない。カリキュラムは独自のものがある。時間割上は、「英語」として表記している。

1、2年生は隔週で年間15～17時間、3年生以上は週1時間で年間35時間の授業数がある。低学年は特設、中学年以上は総合的学習の中の35時間である。サブテキストとして、3、4年生で「ABCノート（ぼーぐなん）」4年生以上で「WORDBOOK（ぼーぐなん）」、5、6年生で「SUNSHINEKIDDS（開隆堂）」を使用している。

1年生から6年生までの授業の全てを、ALTと学級担任とのTTで行っている。ALTは2人でそれぞれアメリカ人、カナダ人である。小学校英語への理解が深いとともに日本語にも堪能であり、人間的にも温かみのある優れた人たちである。また、アメリカ人ALTは、附属中学校、附属高等学校のALTでもあり、彼の存在が今後の交流授業において果たす役割は大きいと期待している。

年間のカリキュラムは、前年の実践をもとに毎年改良を加えながら作成している。各学年1名以上の英語担当教員がいて（職員互選）、「英語部会」が存在する。英語担当教員を中心にして、カリキュラムに基づき1時間ごとの学習内容について細かな打ち合わせを行う。ALTが大学の非常勤講師として採用されているので、授業以外の時間的な拘束がない。よって打ち合わせはごく限られた時間で行なわなければならない、さらに彼らが優秀であるがために、学級担任の出る幕がないことがある。

本年度は、初めての試みとして、「交流」を各学年で計画、立案、実行した。金沢大学留学生センターの全面的な協力を得て、各学年で留学生との和やかな交流が実現した。その主な目的は、日頃ALTを通して学んでいる英語を活用することであった。その目的の一つの実現の方法として、身近なお手本となりうる中学生との交流の授業が存在する。

2 授業実践の計画

2-1 実施に向けて

今年度当初に、それまでの小・中間の交流をふまえてどのような方針をもつかについて小・中の英語担当者同士で話し合った。結果、できればこれまで実施してきた互いの授業参観から一歩進んで、授業交流を試みるのができたらよい、という考えを持つに至った。

問題は、小・中それぞれが別の研究課題のもとで校内研究を行っており、校内研究の枠の中で授業交流ができるかという点である。

中学校では「共に学ぶ」をテーマに「異学年交流」から「異校種間交流」へと発展する方向性をもっていた。小学生との交流授業は、表面的には何ら問題はないかのように見受けられた。

小学校では、「知識創造」をテーマに掲げて2年目、「かかわり」による授業の活性化をはかることが各教科・道徳・英語および情報に求められていた。先述したように英語を教科ではなく「必修」として実施しているために、教科論と同じ縛りは受けられないものの、「活性化」についての考えを明らかにせねばならない。つまり、子ども同士のかかわりで生まれる活性化以上に中学生との交流で活性化されるものを見出さねばならないということなのだろうか。

また、いざ「交流」を試みる授業展開を考えるとときには、共通の授業案の形式も必要ではないか。などなど、話し合いが具体的になればなるほど、課題が多く見えてきた。

しかしながら、初めての試みであるのだから、とにかくやってみて、そこから学んだことを次に生かす、という気持ちで取り組むことで合意を得た。そして、とりあえず年間3回の計画をたてることにした。

2-2 計画

第1回 7月 「初めまして」「夏休みに動物園に行こう」

第2回 10月 「絵本を読んでもらおう」

第3回 11月 「私はだれでしょうーお話パート2ー」

グループ学習を行う。1回の交流を終えるごとにその実状に合った次回の交流の内容を相談して決定する。

第1回は、初対面の挨拶を交わし、近づく夏休みに行きたいところという意味で、「動物園に行き、好きな動物を見て、飲み物や食べ物を買うなどして過ごす」という想定で、会話を楽しむ。授業は中学校教師が進める。第2回は、その反省点を生かして行う。第3回は、できれば第2回とつながりのあるテーマで行いたい。

2-3 対象および授業者、助言者

小：4年2組児童 30名

中：2年1・2組選択英語生徒 19名

小学生は、特別活動の自由裁量の時間を使う。毎週HT（ホームルームティーチャー）とALTによるTT（ティームティーチング）で英語を学んでいる。

中学生は、普段の授業のほかに英語を選択し、2クラス合同で学んでいる生徒である。

授業者は小学校 学級担任 乗富 章子、中学校 英語担当 小川 正清 である。

また、助言者として教育学部英語教室の久保拓也准教授（中学校）、同じく加納幹雄教授および山本卓准教授に継続して参観、指導をお願いした。

3 第1回交流授業

実施日時 7月10日(火) 5時間目

実施場所 小学校ランチルーム

詳細は、中学校研究紀要第50集に記載されているのでここでは省略し、その概要を述べる。

3-1 授業の目標と使用する英語表現

小学生の目標

- ・ これまでに学んだ表現を用いて、話すこと・聞くことに慣れる。
- ・ 初めての中学生との **Talking** に参加しようとする。

中学生の目標

- ・ 初歩的な英語で自分の考えや気持ちを小学生に伝えることができる。
- ・ 話し手の意向などの心情を推し量りながら理解できる。

主に使用する英語表現

- ・ **Nice to meet you. My name is ~.** などの挨拶
- ・ **I want to see ~.** の表現

3-2 授業の実際と所感

① 挨拶

② 自己紹介 アイスブレイキング

③ 夏休みに行きたいところについていくつかの候補の中から動物園を選ぶ

④ 活動に使う英語の練習をする

- ・ 動物 (gorilla, giraffe, elephant, lion, tiger, rabbit)
- ・ 飲み物、食べ物 (juice, water, hamburger, sandwich, pasta)
- ・ **I want to see a lion.**
- ・ **I want to /drink juice. / eat hamburger/ etc.**

⑤ グループごとに自分たちが選んだ表現を決め、練習する

⑥ 全員の前で発表する

初めての授業であったため、授業の立案、具体的な運びを中学校の小川氏が一手に引き受けると申し出てくださった。すでに行われていた異学年交流や、他教科の異校種間交流の授業でも、その中心となる(おそらくは上級学年を担当する)先生が授業を進め、他方を見守るという形で行われていたと思われる。

筆者は、やや不安と疑問を感じていた。2つの集団があり、それぞれの担当者がいるのであれば、二人で指導するのが当然と考えていたからである。

事前の打ち合わせこそ念入りに行い授業の流れは互いに十分理解していたとはいえ、子供たちが互いに出会うのも初めてなら、授業者がそれぞれの児童・生徒と出会うのも初め

てという状態で授業が始められた。さらに、その授業が中学校の全体研究授業に位置付けられていたため、小学生はあまり知らない先生たちに囲まれた状態で緊張して過ごした。

活動①および②は、短時間でスムーズに行われた。③は、教師が「動物園に行くことで」といったために、選択の必要なく動物園に行くという設定が行われた。

④では、動物、飲み物、食べ物の単語は、小学生でも十分に知っていて発音にも問題がない。⑤では、I want to までを教師が言い、そのあとに名詞をつけるところだけ練習したので、小学生にとっても難しくない。ましてや中学生にとっては当然知っている表現なので、意欲的な表情を読み取ることができなかった。

活動の⑤に入っても、授業の活気が感じられず、グループごとにぼそぼそという話し声が聞こえる程度であった。筆者には、中学生にも小学生にも「英語を話したい、話さなければ次に進めない」という必要感がなかったように思われた。⑥では、「驚いたことに」と後の授業整理会で多くの中学校の先生方が話しておられたが、小学生のほうが中学生よりも「英語らしい発音、イントネーション」で話していた。小学生が日ごろ接する英語はALTと担任からに限られている。それに対し中学生は、英語を読む経験が加わることもあり、またその発達段階から考えて恥ずかしさ、ためらいなどがあるために、いわゆる「ジャパニーズイングリッシュ」になっているように見受けられた。

授業後の整理会で、教育学部英語教室の久保拓也先生から指摘があったように、交流授業で大切なことは、双方に「学び」が保証されることである。単に中学生がボランティアを行っているようでは「交流」ひいては「連携」の意味が失われる。

ただ、中学校の数人の先生方から「中学生が普通の授業ではなかなか見せない、やさしい顔をして小学生に接していた」「小学生の話にうなずきながら聞いている姿があつてほっとした」などの感想も出され、今後の参考になりそうな予感を得た。

小学生の感想は「心配していたけど、簡単だった」「簡単すぎた」というものが多く、易しい内容で安心して活動できるようにすることがよいのか、多少難しくとも、中学生の援助のおかげで乗り越えることができた」と実感できるものがよいのか、迷うところである。

3-3 児童の感想

《中2と英語をしたらとってもおもしろい》 T. N

中2と英語のお勉強をしました。ぼくは中2とやるなんてと思って行ったらなんかわくわくしました。まずは、名前をさかさまに言いました。ぼくは「みくた」です。名前を言うのは簡単だけどさかさに言うのはとってもおもしろいです。次に動物を言ったりしました。「もうちょっとむずかしくしてくれたらな」と思いましたが、楽しかったのでとってもよかったです。

《中学生との交流 ドキッはじまり》 O. Y

「いろはにほへとち」今日はこの名前がグループ名です。なぜかというのと、、、実は中学生との交流なのです。いすにすわった時から「ドキッ」のくりかえしでした。あせはかくし、中学生となんて、、、ちょっとむずかしそうだなと思いつつちようせん。耳のあな

をほじって聞いてみたり、口の奥そこ（おなか）から声を出したりしましたが、意外とカントンでした。Zooの言い方はわかったけど、前につく言葉がわかりませんでした。（おかいものときやどの動物を見にいくかの時）中学生がすぐ教えてくれました。10月のときはもう少しむずかしい方がいいな。

4-1 第2回交流授業

実施時間 10月1日（月） 1時間目

実施場所 小学校4年3組教室

9月に教育実習が行われ、時間のゆとりがないために、第2回の交流授業は10月に行くことにした。1日は、その前の金曜日まで教育実習が行われており、久々に担任が一人で子どもと接する第1時である。小学生にとっては様々な意味で担任との「よりを戻す」大切な時間である。かなりの決心が必要だった。が、中学校の行事など（合宿、体育的行事など）で他の日は都合がつかない。このあたりが「連携」を目指す上での今後の大きな壁になっていくことが予想される。

ともあれ今回は筆者が計画する。中学生にも「学び」が保証されるもの、「中学生はさすがだ」と小学生が思えるもの、そして互いに「やってよかった」と思えるもの。

考えた結果、「絵本の読み聞かせ」が浮かんだ。筆者は学級で日本語の本はもちろん、時々英語絵本も読み聞かせを行っている。それを中学生にしてもらうのはどうだろう。たまたま手に入った、「ぐりとぐら Guri and Gura」シリーズや「モチモチの木 The Tree of Courage」などの民話、ディズニーの絵本、日本昔話の絵本などを候補として持参し、中学校の先生に選んでいただくことにした。

中学校では、日本の民話集から「かさこじぞう The Greatful Statues」「いっすんぼうし Little One-Inch」「はなさかじいさん The Old Man Who-Made-Tree-Blossom」「したきりすずめ The Tongue-Cut-Sparrow」を選び、それぞれを80～100程度の文に縮小した上で、（この作業は、小川氏が一人でやりとげてくださった。頭の下がる思いである。）読みの練習に入っていた。「読み聞かせ」という活動は、小学校時代はそれを聞いた経験こそあるものの、自らが読み手となるような経験はほとんどなかったであろう中学生は、単に「音読」する以上の工夫ができずにいたようだが、教師のアドバイスを受けて、簡単な絵を画用紙に描くなどして準備を進めていた。

反省すべきは、前回の失敗にも関わらず、筆者が一度もその様子をじかに観察したり、音読練習している授業を参観したりすることなく「待っていた」ことである。実際、教育実習中はすべての担当時間が拘束され、空き時間は中学校との調整がつかず、実習生の指導が夜遅くまでかかる中、中学校の先生と連絡をとることさえかなり難しかった。3、4回の打ち合わせ時間をとることがかろうじてできた。

この実践も中学校研究紀要50集に途中まで記載されているので、その概要を筆者の立場からの分析や所感とともに述べる。

4-2 目標と使用する英語表現

小：中学生の読んでくれる話の概要を理解し、何の話か理解することができる。

わからないことを積極的に質問することができる。

中：相手の立場に立った話の仕方を工夫し、伝えることができる。

表情豊かに「読み聞かせ」することができる。

質問に易しい英語で答えることができる。

英語表現：How do you say ~ in Japanese/ English ?

4-3 授業の実際と所感

- ① 挨拶
- ② 今日の授業についてのガイダンス
- ③ グループに分かれて「読み聞かせ」活動
- ④ 感想を述べ合う 教師からの評価

今回は①からてこずってしまった。というのは、筆者は、小学校の授業の進め方としてまず初めに互いに挨拶をしあって、それからグループに分かれると思っていたために、中学生の座るスペースを空けてみんなで待っていた。ところが中学校側では、時間の節約ですぐにグループに分かれ（前回と同じグループで活動する予定だったので）そこで挨拶をかわすと思っていたようである。

中学生に合わせていこうとしたところ、小学生は前回のグループを忘れていた子どももいて、案の定混乱。ようやくグループごとに着席したときには10分も経過していた。

②では、互いに予告してあったために何とか理解できたとみられた。そして③に入ることになる。

③ 中学生のグループが小学生のグループの前に立ち、日本の昔話を、絵を見せながら語る。最後まで読んでから「何の話ですか？ What story is this?」と尋ねることになっていた。

初めの混乱が影響したのだろうか、互いに他のグループの邪魔をしてはいけないという配慮があったからなのだろうか、どのグループも中学生のぼそぼそ、ごそごそというような声がし始める。小学生がしきりに筆者に顔を向け、何かを訴えようとしている。そばに近づくと「わからない」「聞こえない」「どこで質問したらいいの?」と問いかけてくる。

中学生の様子を観察していると、以下のような問題点が見られた。

- ・やはり声が小さすぎて聞こえない。対面していても聞こえない。
- ・読み方が早すぎる。間がない。
- ・うつむいて、紙に書いた字を読んでいる。小学生と目が合わない。
- ・読むことで精いっぱい、ジェスチャーが少ない。

そして、“What story is this?”と尋ねると、子どもたちは、日本語で「かさこじぞう」

「いっすんぼうし」「舌きりすずめ」「花さかじいさん」とそれぞれに答えていた。全部正

解、それはなぜか？簡単である。絵があったから。彼らは、英語を理解したわけではなく、絵を見て何の話なのかがわかったのである。英語など、関係なしに。

筆者は、即応的に小学生を呼び集め、話をした。英語の「学び」を作らねばならないと考えたからである。「自分たちのグループのお話に出てくる英語の言葉を何か一つ、中学生に質問して教えてもらいましょう。そしてそれを先生に教えてください。」

担任に報告しなければならぬと悟った子供たちは、遠慮がちにはあるが中学生に尋ね始めた。“How do you say Uchidenokozuchi in English?” などというように。

そして子供たちが覚えた言葉を④で発表し合うことになる。

子供たちが中学生に教えてもらった言葉は、

一寸法師では、Magic Hammer, needle など

舌きりすずめでは、sparrow など

花さかじいさんでは、cherry blossom, ash など

かさこじぞうでは、rice cake など

であり、それぞれのグループで学んだ単語は、クラスの子供たち全員に知らされ、それなりの学びがあったということが出来る。

一方で中学生にとってどんな学びが保証されたのだろうか。戸惑いながらも、彼らなりに一生懸命「読み聞かせ」をしようと頑張っていたに違いない。そこで筆者のほうからグループの一人ずつではあるが「発音がきれいだったよ」「少しジェスチャーをしてくれたからわかりやすかったよ」「すらすら読んでいたね」「小学生の質問にゆっくり丁寧に答えてくれましたね」などの評価の言葉をかけた。そして、「英語の授業としてのふりかえりを中学校に帰ってからしておいてください。」といて授業を終えることにした。

中学生と別れてからの子供たちは、「わからなかった」と訴えた。これらの昔話は、次の第3回交流に向けての準備と考えていた筆者は、絵を見せずに読み聞かせを試みた。その結果、内容も表現も、言葉（単語）も子供たちはしっかり理解し、「読み聞かせ」の活動そのものには問題はなかったととらえている。

では、問題は何か。最も大きな問題点は、「コミュニケーション」のための交流授業であるのにコミュニケーションそのものがぎこちなく、なかなか自然な会話が生まれにくいことであると痛感した。さらに、それはなぜか。「英語」の必要感がなかったからである。絵をみればわかった。大事な部分は、日本語がとびかっていたのである。「英語」から離れないこと。一番簡単なそして基本的な構えが教師にも子供にも欠けている。

4-4 児童の感想

《いっすんぼうしの英語版》 Y. S

中学生との英語で、いっすんぼうしを英語で読んでもらいました。ぼくは、日本語で「いっすんぼうし」と聞こえたのでわかりました。あとの部分は絵とジェスチャーでわかりました。ぼくは、「マジックハンマー」がうちでのこづちとわかってびっくりしました。マジックハンマーは、マジックをするためのハンマーだと思ったからです。新しい英語を知っ

てうれしかったです。

《 おむすびころりん?! 》Y. O

今日、英語の第2回目「英語交流」がありました。きのうの夜まで何も思っなくて朝来てから気づきました。今日の交流では中学生の方が苦勞していました。それは、中学生が英語で読むからです。(今日は小学生が本の題名をあてるということでした。)聞いていたらよくわからなかったけれど、絵をみていたらわかりました。私たちのグループは「したきりすずめ」のお話でした。聞いていた時は「おむすびころりん」かと思いました。でも単語(スパロー)も覚えられてよかったです。

5-1 第3回交流授業を前に

失敗を重ねる交流授業であることを深く反省しつつ、第3回に向けての計画を立てる時期を迎えていた。しかもその第3回は、研究発表会(小学校は第53回)の公開授業として行われる予定である。思案を巡らしている筆者に中学校の小川氏より連絡があった。それは、筆者にとって思いもよらぬことであった。中学校では前後期制をとっているが(それはもちろん知っていた)、選択授業は前期と後期で入れ替わることになっていて、第2回の交流授業の後10月中旬から新しいメンバーで選択英語がスタートする、というのである。中学校では、当然のことであるから改めてこちらに伝えることでもないが念のため、というその連絡だったが、筆者には予想しないことだった。しばらくは茫然とした思いだったが、よくよく考えてみれば「もう一度初めからやり直せる」ということではないか。このチャンスを最大に生かしたいと考えた。

中学校の小川氏と相談の結果、11月の交流授業を第4回ということに設定し直すことになった。第1回、第2回の教訓から、今度こそ念入りな準備が必要であると思った。子どもたちの交流の前に、筆者自身が一人で中学生の前に立つ機会を作りたいと考えたのである。

5-2 授業参観(1)

実施日 10月22日(月) 2時間目

実施場所 中学校コンピュータールーム

まず新しいメンバーを知るために、授業参観に行った。人数は18人。小学校から連絡入学した生徒が大半を占めていた。前期の生徒より、明朗で活発な印象を受けた。

「相手にわかりやすく伝え、簡単な英語のやりとりをしよう」というめあてのもと、小学生が授業で使う英語の紹介が組み込まれていた。

- ① 自分の名前を名乗り、はじめまして、握手。相手の名を聞く。
- ② 自分の年齢を言ってから、相手が何歳か聞く。
- ③ 自分に兄弟が(姉妹が)何人いるかを言い、相手に何人いるかを聞く。
- ④ 自分の誕生日を言い、相手に誕生日を聞く。
- ⑤ 最後にお礼を言う。

という順序で初対面の人と友達になる会話の仕方を学んでいた。そして向かい合った生徒同士でその練習をしていた。

次に、color, animal, fruit, food, drink の順で自分の好きなものを言い、相手の好きなものを尋ねる、という活動を行い、授業の最後に以下の項目について自己評価を行っていた。

- 1 相手にはっきり、ゆっくり、大きな声で伝える
- 2 相手の反応（理解しているかなど）を見ながら話す。
- 3 日本語を使わない。簡単なやりとりなのですべて英語で。
- 4 ジェスチャーなども交えて、おおげさに語りかける。
- 5 相手の言っていることをしっかり聞く。はっきり聞こえなければ Pardon? Say it again, please. などを使って、優しく聞き返す。

筆者も仲間に入れてもらって、①～⑤の活動に参加することができた。そして、中学生の話す速さやイントネーションについて少し理解できた。

中学校の小川氏が前回の経緯について謙虚に受け止め、丁寧に交流に向けて取り組んでおられることがよくわかり、感銘を受けた。次週も参観し、その場で簡単なスピーチをさせていただくことをお願いした。

5-3 授業参観（2）とスピーチ

実施日 10月29日（月） 2時間目

実施場所 中学校コンピュータールーム

次週、予定通り授業の後半に参観に行った。（選択授業は2時限続いて行われている。小学校の校時に合わせると、授業の後半だけ参観が可能である。）この時間は「小学生の語彙を知ろう」のねらいのもと、小学校4年生までに扱う単語と文を紹介していた。小学校で扱う単語は中学校のそれよりかなり多い。というのは、覚えること、書くことを求めているからである。さらに、自分にとって興味深い単語が自然に耳にはいればよいというスタンスで授業を行っているからである。中学生が「忘れた」あるいは「知らない」と言っていた単語には次のようなものがあった。

動物：pappy, hippo, alligator

虫：bug, cicada, dragon fly, stag beetle, tadpole,

野菜：cucumber, spinach, egg plants,

授業の後半15分をいただき、筆者が教壇に立った。ショートスピーチは以下に記す。

Hello everyone, nice to see you.

Are you enjoying your class? The last week I felt you were studying very pleasantly.

Today, I will speak about the elementary school children of 4th grade. They are very powerful and speak in louder voice than you. But, you know, their English is not enough. And one of the most important points is that they are very shy when they talk with older.

Maybe, you will be shy also when you meet them. So, I would like that you have confidence as an older and speak in a loud voice and slowly. They can answer some easy questions from you.

At the next week when you meet them, I have some plans named “Ice breaking game”. Please enjoy it with them.

Thank you.

そして、いくつかのクイズを出した。次週の ice breaking game につながるものである。

- ① tadpole, ladybug, dragon fly, pappy, beetle のうち、虫でないのはどれ？
- ② apple, water melon, orange, peach, banana, tomato のうち、果物でないのは？
- ③ corn, banana, pineapple, sunny side up(後に小川氏が訳)で共通のことは？
- ④ tea, apple, rabbit, candy で共通のことは？

筆者が英語でスピーチをするなど、思ってもみななかった生徒がいたようで、このスピーチをすること自体が大いに ice breaking になったようである。さらに簡単なクイズをすることで生徒の表情は和らぎ、次週の子供たちとの出会いが今回初めて「楽しみなこと」に思えた瞬間であった。

5-4 第3回交流授業

実施日 11月5日(月) 1時間目

場所 小学校ランチルーム

めあて 中学生と小学生が ice breaking のゲームを通して互いに親しくなる。

5-5 授業の実際

- ① 挨拶 小・中の児童・生徒が集団で向き合い、挨拶を交わす

Nice to meet you.

教師同士も挨拶し、小川氏が小学生に、筆者が中学生に英語で言葉をかける。

- ② めあてと活動の説明 筆者は小学生に日本語で、小川氏は中学生に日本語でゲームの説明を行う。

- ③ Game1

- ・ 2分間で、中学生は3名の小学生と、小学生は2名の中学生と

“Hi! my name is Masakiyo.”

“Hi! My name is Akiko.”

“Nice to meet you.”

“Nice to meet you, too.”

の挨拶を交わし、元の席に戻る。

④ Game2

- ・同じ誕生日の人を見つけてグループを作る。12のグループができる。
2分30秒で行う。それを全員の前で話す。
中学生：We were born in... 小学生：January.

⑤ Game3

- ・中学生用のカードには色の名前が英語で書かれている。小学生のカードには色が塗ってある。What color do you have? と尋ね合い、同じ色のグループを作る。2分。

⑥ Game4

- ・すべての色が異なる7人のグループを作る。2分30秒。
このとき、教師が意図的に大きく分けて2つのグループが互いに向かい合って座れるように椅子の配置を変えていく。

⑦ Game5

- ・グループごとに一人ずつ “My name is Akiko. I have yellow.” のように言う。言い終わったら “Face to back.” で互いに背を向けるように座りなおす。そして「今、同じグループになった中学生（小学生）の名前を紙に書きなさい。」と指示する。覚えていなかったら、訪ねて書くように促す。

5-6 所感

授業はほぼ計画通り行うことができた。賑やかな授業になった。それがねらいでもあった。授業後、学部の英語教室の加納教授および久保准教授より、以下のようなアドバイスをいただいた。

- ・ストラテジーを教えておく
- ・ブレイクダウンを避ける。
- ・活動から英語を離さない。常に英語をする。
- ・2分たったらどうするのか、指示を明確に。
- ・中学生は言葉だけで理解させる、小学生には、言葉と動作や具体物で理解させる。
- ・”Nice to meet you.”と言えたら、大いにほめる。

どれも納得できる指摘である。せっかくのチャンスがありながら、子どもたちはゲームを楽しんだものの、「英語」にどれだけ触れていたか疑問である。一人ずつ言っていてトータルすればかなりの言語量があるが、一人では英語を話すチャンスはほんの5～6回だったかも知れない。第4回の交流授業を行うにあたり、心に銘じておきたいと思った。

5-7 児童の感想

《 中学生との英語》 T. Y

なれてきたけど、まだ口が小さくしか開かずにもじもじ言ってしまいます。今日は4つのゲームをしました。同じたんじょう月をさがせといわれてドキっとしました。なかなか同じ人がいなくてあわてました。でも一人だけいてよかったです。色のときは同じ人がい

ることがわかっていたから落ち着いてできました。

《中学生との英語》 Y. O

1 時間目から中学生と英語の勉強をしました。中学生は新メンバーでした。今日はとても楽しいゲームがたくさんでした。握手をして仲良くなるごあいさつのゲームや、自分のたんじょう月を伝えるゲーム、色別のチームに分かれたりするゲームでした。今日はお遊ばいでどだったけど、次回からびびびしやるそうです。なんだかとってもむずかしくなりそうでドキドキですが、楽しみ、楽しみ。

6-1 第4回交流授業

実施日 11月16日(金) 2時間目

実施場所 小学校ランチルーム

これまでの失敗を生かして、子どもたちが英語から離れないように(子供が英語を学んでいるというメタ認知のもとで)授業を進めることを鉄則にして授業に臨む。

授業案を以下に紹介する。

6-2 授業案

4の3 英語学習指導案

第2日2限 ランチルーム

授業者 HT 乗 富 章 子

中学校 小 川 正 清

1) テーマ What am I?

2) 本テーマにおける知識創造

先の交流で取り上げた物語を話題にしたクイズづくりを通して What am I?に至る英語を発話することができ 友達や中学生と温かなコミュニケーションを深めることがで

第3回目の中学生との交流授業である。10月に行われた第2回の交流では、中学生が日本の昔話を読み聞かせしてくれた。本時は、それらの物語の登場人物などに関わってグループごとに提示された課題を、簡単な英語に置き換えてクイズとして出題し、聞き手はそれを聞いて答えを考えるという活動である。ふだんの授業で接しているALT以外の英語を話す人が中学生であり、中学校の先生 (Junior High school Teacher 以下 JHT) である。彼らとのふれ合いを通して、英語でのコミュニケーションを深めることをめざす。

出題する側の中学生は、与えられた課題を同じグループの小学生が答えられる程度の3~4つの疑問文として提示できるよう考える。出題する際には、中学生が尋ね小学生がそれに答えるというやりとりを回答側のグループの前で行う。回答側のグループは、そのやりとりを聞いて課題となっている答えを考えるのである。

子ども (小学生) にとっては、これまでに会った英語表現が唯一の手がかりである。出題側のやりとりから理解できたりニュアンスが伝わったりする表現を見つけて聞き取り、”What am I?” のゲームに楽しんで参加できるようになることが本テーマの知識創造であると同時に今後の英語の学習に生きる力にもなりうると考える。

3) 「かかわり」を活性化するために

(1) 本テーマにおける「かかわり」の活性化

本テーマにおける「かかわり」の活性化を以下のようにとらえる。

- ・What am I? に至る様々な表現の理解をめざして、友達と一緒に考えたり中学生に質問したりする。

- ・中学生を交えたコミュニケーション活動に参加しようとする。

(2) 本テーマにおける「かかわり」を活性化する手だて

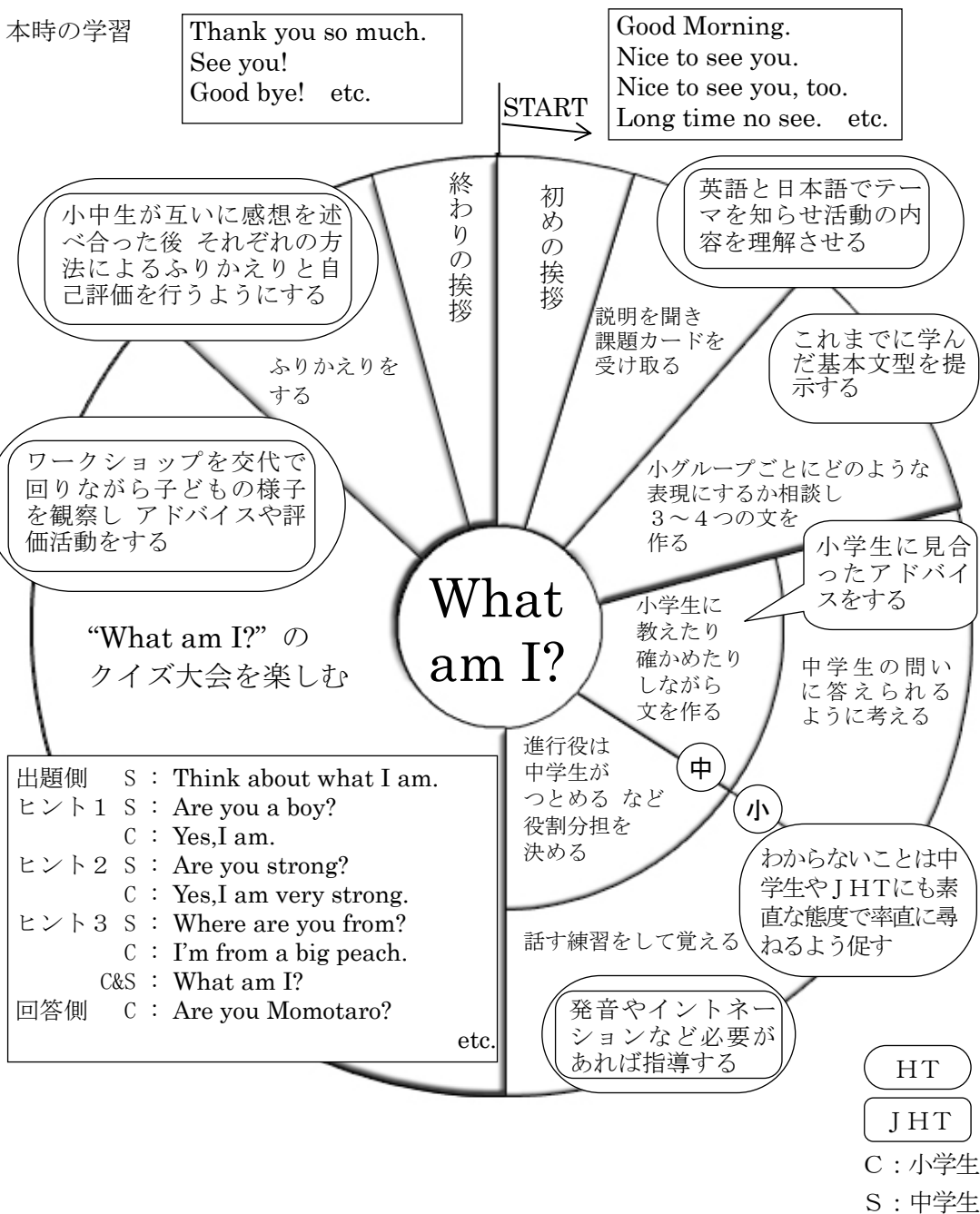
① 体の様々な感覚を使って理解を促す

聴覚はもちろん、視覚、体感覚などを使って理解を促す。初出の表現はないと予想されるので、子どもにとっては、これまでに会った表現を思い出すことができるかどうかを理解するための重要なポイントとなると思われる。単に話を聞くだけでなく、手がかりとなる基本表現を文や絵を使って提示し、いつでも見ることができるようにしておく。また、生きたコミュニケーションになるには、分からないことを率直に尋ねることはもちろん、話すときの表情やうなずく、首を振るなどの小さな動作も手助けになる。恥ずかしがらず友達や中学生、教師に質問し、その動作なども見て学ぶ姿勢をもたせたい。

② 中学校の先生 (JHT) と協同してアウトプットしやすい状況を作る

出題は、いわゆる3ヒント (もしくは4ヒント) ゲームの形式で行う。最後の”What am I?” の発問は全員で言うことを初めに伝える。役割分担を明確にして、短い時間で問題を作ることができるようにする。基本的に中学生にはJHTが、小学生にはHTがそれぞれ必要な指導を行うTT体制とする。発達段階の異なる、しかも4年の年齢差のある児童・生徒を指導するのであるからそれぞれの教師が理解できる対象の児童・生徒の実態などについて事前に十分打ち合わせておく必要がある。また、本時での彼らの様子や表情を詳細に観察し、互いに即応的な指導も心がけたい。そうすることによって、小学生も中学生も安心して互いの交流を図ろうとすることを期待する。

4 本時の学習



《授業スタイルとグループ構成について》

- 全体を大きく2つのワークショップグループに分ける
- 1つのワークショップグループは4つの小グループで構成される
- 小グループはそれぞれ中学生2~3人 小学生3~4人で構成される
この5~7人のグループでこれまで交流授業を行ってきた

《前時の内容と本時の活動について》

- 前時は中学生が小学生に童話や昔話の読み聞かせを行った
- 本時は その話の登場人物やものについての課題を与えられたそれぞれのグループが話し合って3ヒントゲームの要領で作問し 出題し合う活動である
- 課題は小中双方の教師が予め相談の上決めておく

6-3 考察

「初めの挨拶 (ice breaking を含む) は筆者が英語で行った。子ども一人ひとりが英語を発話する機会をなるべく多く保障するために「Stand up and say "Nice to see you." five times and sit down.」というような働きかけをできるだけ多く取り入れたつもりである。よって雰囲気作りには役に立ったが、時間がかかりすぎて中心の活動の時間 ("What am I?" のクイズ大会を楽しむ) を十分に保証することができなくなってしまった。

それは、説明を聞くという活動で顕著に表れていたと思われる。筆者が小学生に話しているとき中学生は待っていないてはならないし、小川氏が中学生に話しているときは小学生が待っていないてはならないからである。

今回は前回に続いて大きく2つのグループに分かれて活動する、という設定を行った。当然そのスタイル自体がスキーマとなっているはずという筆者の思い込みがあった。中学生にはある程度の予測ができていたと思われるが、小学生の方は一度だけの体験はまだスキーマに至っていない。

また、最初に出題するグループの中学生の力量を、教師がどれだけ理解しているかがその後の活動の進み具合に大きく影響する。というのは小川氏が担当していたグループは、小川氏が指名しクイズ大会を盛り上げられる生徒のいる小グループから始められたが、筆者のグループでは慎重なタイプの生徒が多かったのか、促してもなかなか進んで前に出ようとしない。結果、まだ出題ができないうちに時間がきてしまった小グループがいくつかあった。この件については、小川氏と相談してすぐ次の月曜日に行い、同時にふりかえりや自己評価も行うことになった。

6-4 児童の感想

《ドキドキしながらクイズショー》 T. N

今日はとてもたくさん人がいる中での英語でした。中学生と一緒にやっていました。今日はクイズ大会をします。ぼくたちは「すずめ スパロー」です。発表がむずかしいので緊張しすぎてまちがえたりもしました。でも言い終わるとすっきりしました。英語はいえなかったときはむずかしいけど、言った時の後はとても気持ちがいいです。

《研究発表会》 Y. O

研究発表会第2日、1時間目で科目は英語 (しかも中学生との英語第4回)。わたしは楽チンなのかなと思いながらペアをつくりました。私のチームは「ストーン 石」タイトルはいっすんぼうし)。相談しようと思ったらどこからの先生たちがまわりにぞくぞく。でも大丈夫。中学生がカバーしてくれるし、けっこう知ってる単語もあるから簡単にクイズが作れました。

《クイズ大会》 T. Y

英語で中学生とクイズ大会をしました。クイズを作る時はできるだけひねりました。でも中学生から「むずかしいのはよくない。」と言われてしまいました。もっとむずかしかったらだれにもわからなかったかもしれなくて、面白かったと思うのに、、、。ぼくたちのを

聞いてもらうのはできたけどほかのが聞けなくて残念。月曜日が楽しみです。

7 実践を終えて 成果と今後の課題

「連携」の名のもと、自分たちのできる中でそれに近づこうとする考えと連携の必要性や理念を明らかにしてから取り組むべきだという考えが存在する。

筆者は、多くの本校職員がそうであるように、理念やその目的が気にかかっている。中学生と小学生とでは、学力の蓄積の差は明らかである。年齢差のある彼らの学びが双方共に保証されることがありうるのだろうか。年齢が下の小学には学びがあるにせよ、中学生はどうなのだろう。そういう疑問から抜けきれないでいた。

一つの答えは、第1回の交流授業で見つけられそうな予感があった。それは授業整理会の折りに中学校の先生が言われた一言である。「担任する生徒の一人が普通の授業ではなかなか見せない優しい表情をしているのが印象的だった。」と。また、筆者の担任する子どもは、何回かの交流の後、「バス停で、英語で一緒になった中学生が声をかけてくれてとても嬉しかった。」とあゆみ（日記）に記していた。

中学生は、小学生にとって身近なお手本になる。教師より近い存在になりうると思う。本校児童のほとんどが附属中学校に進学する。「あんな中学生になりたい」という憧れを英語の交流を通して、ほんの少しでも感じさせられたとしたら、こんな嬉しいことはないのではないか。「連携」はそこがスタートではないのか。

一方で同じ整理会で何人かの中学校の先生が「教える役を中学生に意識させる」「教える側、教わる側の役割をはっきりさせる」「小学生が中学生にずけずけと言うのは問題」「中学生のすごさを小学生にみせつける場面を」等の発言が続いた。上が下に力をみせつけたり、教え込んだりするような「交流」は、果たしてそれがよい方向なのかどうか。それは「互いの立場に立って」という交流授業の目標と矛盾してはいないか。「共に学ぶ」ことの意義は引き続き考えていかねばならないと強く感じた。

次に授業案の形式についての課題である。先述した円形指導案は、本校独自のものであり、授業の流れをできるだけわかりやすくアピールすることを目的に開発した。しかし、中学校の授業案形式とは異なるものであるため、「同じ授業をするのに、中学校と小学校が別々の授業案で提案することはいかがなものか」という厳しい指摘を受けている。本年度は小学校はこの形式で、中学校は中学校の形式でそれぞれの要項に載せている。筆者も小川氏も違和感がなかったというのが本音なのだが、外部から一つの授業という見方をされるとその指摘も頷ける。今、市内の公立小中で行われている「交流授業」は、中学校の教師が小学校に出向いて、小学生を対象にして小学校の担任とのTTで行うスタイルが一般的である。そこでは、授業案の形式に関わった心配は存在しない。今後、本校のような実践を進めていく上で、克服すべき課題の一つであると思われる。

おわりに

第4回交流授業を前にして、ようやく自分が思い描いていた授業にたどりついた、という感があった。とにかくやってみて、やっぱり失敗という実践が続いた。

この間、何度も相談や打ち合せ、また細案の作成そして再提案などすべてに快く動いてくださった附属中学校の小川正清教諭に心からの敬意を表したい。小川氏は筆者の一言一言を真剣に受け止め、生徒の反応を予想しながら「中学生なら、、、。」と筆者に常に教えてくださった。小川氏の存在が今回の実践に非常に大きかったことをここで改めて記し、心からお礼を申し上げたい。

また、第4回交流授業を迎えるにあたり数回にわたって中学校に足を運び夜遅くまで小川氏と筆者との打ち合わせに加わって適切なアドバイスをくださった久保拓也先生にも、心から感謝申し上げます。加えて、交流授業を初め、本校の英語の授業を何度も参観し、その都度適切で厳しい指摘をいただいている加納幹雄先生、山本卓先生にも深い尊敬と感謝の気持ちをここで表すとともに今後も変わらぬご指導をお願いしたい。

来年度も、誰かが交流の授業を試み、「連携」のあるべき姿を英語の立場から模索する実践を行うはずである。今年度よりさらに一步前進した実践を行うことを誓って、この稿を終了する。

参考文献

教育学部附属小学校 研究紀要 第61集、同要項

教育学部附属中学校 研究紀要 第50集、同要項